湖月鈔

やどりぎ

31

823
JM8 K5+

Freer Gallery of Art
Washington, D. C.

7152

常夏 并四 細 以歌為巻之名 歌ハ なでしこのとこなつかしき色をみばもとのかきねを人やたづねん 花 以詞并歌為名 此巻ハ胡蝶螢常夏篝火とあり一帖ニ名之 細 源氏卅六歳の夏の事也 花同 愚按 一説によるときハ卅六歳ノ夏
ナリトノ

いとあつき日東のつりどの
とハ六条院よりおるゝ殿釣
殿よおりて魚をつる所なと
涼をとるひ細おろゝ字
どして鯉鮒とらせ
あつかふ所花鳥よ
所見し
にし川よりたてまつれる鮎
細 桂川之伏川 桂野
といふよ桂川之
花 西宮記云 桂川 堤川ハ
左京職府撿知葛野川ハ
右京職府撿知己上貢供ス
鮎ヲ云 今案 堤川ハ東河
葛野川ハ桂川之
いしぶしやうのもの 石伏
鮖 和名 伊之不之 鮖 日
花 亭子院歌合集ニ云いしぶし
そのほかのあゆをとりて
うじてまゐらする
細 ゆふつ中 一説 …
がるゝれさせ…
どそくへさせ…
へまんくめて…

いとあつき日。ひんがしのつりどのに出て（源の）
すゞみ給ふ。中将のきみもさぶらひ（細 夕霧之）
給ふ。したしき殿上人あまたさぶらひて。（細 六条の院の事同く）
にし川よりたてまつれるあゆ。ちかき川のいし（細 賀茂川といふ付の事）
ぶしやうのもの。おまへにてでうじてまいらす（鮎之）
例の大殿のきんだち。中将の（箋 柏木以下の兄弟達之 柏木ハ六条大臣之）（夕霧の方へ）
三 御あたりたづねてまいり給へり。さう〳〵しく（源詞之）
ねぶたかりつる。おりよくものし給へるかな
とて。おほみきまいり。ひみづめして。（細 ひみつとて…）
すいはんなど。とり〳〵にさうどきつゝ（細 夏の事面白し）（飲食之様）
くふ。風はいとよくふけども。日のどかに
くもりなき空の。にし日になるほど。蝉の

せめてあらしてまつりさく
めづらしくて 凡 少水(ミツ) 細 ひやしくるすらさえ 凡 干飯などの數あり
まいらん 凡 水飯 細 今の世にもありてひめしと称之
凡 ひめハ飯をやわくして冷水までありひて冷汁まで食之
あのくへいとむとくなら
細 源翔ぐくまで六条院
ハ源しきあるうよ之盃
でこきハらしのおるう暑
さらそてあらうらし殿閣
生微涼のあり 盃 ひとく
ハ無流くしら枕茶みまむ
くなり抱堰干のうさま
やら船ちく 暑接 涼りう
ねもあ素涼をとるきん
るるへし
ひとうろ此ハおそびあどま
細 さらわさもるきとえ
盃 さらわさるも暑ちより
てんよいつむで父とでハ
美しげうしとえんてまさ
をうまとえ 抱暑の心を
え
みびおもとうぬれども
盃 乗本ニ此ノ 盃 常綴之

暑気の節も入綴も暑時ハしきされ給ふれども川ろぎまでのかくうてうくくさ
みしあか湖そて給へきえ 愚案
給ふさうぬめぬべうらん
首尾なり

いそこゑしうそや
篝源よ傍うやせしん
いうくうら傍人咲ちえん
とく

こゑるどもいとくらしげよまされど
源翔之
あのくへしとくなからきよのあらうしさう
盃 無礼之 暑時ハ礼もいらぬ之
れむしくいのつきハゆうされるんやしてよ
まかしまつう。いとうるこころハおそびあれども
をすきぬしく。さすうよくらしげてさ
こしそくられ。まやづくへまろわきさひて
宮をとひもとくぬ雅よう
じくえがさうしんるおび。まりしとぬや
細 ぐくまよ弁をお斉人とえ 仰 人妻不可そびなりとえ
どよ。うてみくぐするおもうれどのゑ無よ
あんことの。あらて然んしく給ひて
さうめぬへりんこと。猶てゆのをまへおうる

じつうよ源の御手蹟そうとえ
とうくゆくさるびおくうらしぬしをげん 世間
のくしをゆびつろおしやるどのさまへど
細 人々のゑえ
めづらしとしてうちりそでこきえん
抱ぐうさを見てねべうしこゆりうやう
ゆくされいて源しきうらんよせたう 背
押
とりてうつうひ給。いうそてこし
細 源の翔之
近江の君と云人之母ハお弟乃
ぞやゆとぐの。風りぐしのむまをえんふうろ
此呼了 ゆ肢
君もふ
いざくしづき給しまねぶ人うんあらし。
拍の男之 女加梅大臣之
まくしみへして弁お稍よらひさきへど。
細 弁のお稍の翔之 盃 それがしがぞと云之
ことぐしう。さゆましいひおきえくささこと

この春比ほひ
細 蛍の巻の奥にあり 花 蛍の巻の比と云
わりなくは蛍の比と云
つぎの巻の比みゆめのこととい
ゆつきまや 是按 花
府の夢のゆへをとふ
ねくろして人蛍まも
内府のこと名家ども人
あらはみことめかとの
まひをとれそれ蛍ま
てあらん内府のことを
手ふかうを相手のつけ
てよひいまいしれしえ
此近江君如しきさ人之家
の損云く
かれらひ 細 觸也 睦觸縁
しりなき師説よふれ
くらえまなしたなく
けそんなり 河 家損 家
細 家流 腹をすへのあるそ
人の家損あるとよく
いとめりあり 細 源の詞也さ
しとも内大臣流するとあまり

侍らざりけるを。この春のころほひ。ゆめ
がたりし給ひけるを。ほのきゝつたへ侍りける女の。
我なんかこつべき事あるとなのり出侍
りけるを。中将の朝臣なん聞つけて。まことに
さやうにふればひぬべきしるしやあると
たづねとぶらひ侍りける。くはしきさまは
え知り侍らず。げにこの比めづらしき
世がたりになん。人々もし侍るなる。
かやうのことこそ。人の家のそこなはるゝ
わざに侍れと聞ゆ。まことなりけり
とおぼして。いとおほかめるつらに
はなれたらんをくるゝかりをしひて尋

さ候うものとよくく
とらし侍る 河 侍るは父母の源より兄弟ども列をさぶらふぞ 遊仙 細 兄弟多くといへり
師 族乱まてうぐ給へらば 河 躰忠集 乱れてひらうされてもぶ侍の友よ
らくわら見出ても
うつけきそ 細 此詞推
の事を尋まほしけれど乃不
よおりいつもも貪なり
ら給ふ 師 欲がまれ
らなり
名のりも物うき
細 親身をどはさしもうき
われやうん名のりあるん
もなききこえく
らくごうく
そのうへは乳まてくるすも 細 内大臣も
あるしく
細 ことくもさ候ねあるよ
どうり腹あるべき別した
あるひもまたましきよく
くりすき月も濁まる
あまはくりして八けべ近
蛍 かひり腹よあり女
みえそまらまよう
らぬすやとく

ね給ふがふくつけきぞかし。いとともしきに
さやうならん物のくさはひ。見いでまほし
けれど。なのりも物うききはとや思ふらん。
さらにこそきこえね。さてももてはなるゝ
ことにはあらじ。らうがはしくとかくまぎ
れ給ふめりしほどに。そこきよくすまぬ水
にやどれる月は。くもりなきやうのいかでか
あらんと。ほゝゑみての給。中将の君も
くはしくきゝ給ふ事なれば。えしもまめ
だゝず。少将と藤侍従とはいとからしと思

中ねのゝゑとゝも 花 夕霧るゝとゞめでぬとへ云法皇とまぬとろゑ人々の給ひし

ともあるべし 細 是ハ梅本之云々 花意後了抄此席に梅本不審之 孟 師曰

朔月や 細夕霧をさして
のまゝく雲井の為よいさ
らひきまゐらすと孟信とゑ
ひきあはれ之 細 尋常なとハ蔵
激勝の女子をあつかふも
ひろへとゝく
人々ろさ君の給て
師 雲井のまゝに夕霧ハ
内府よりさうれしかとと人
もろさとゝへ 河八行ヶ宿
如ありらし
ときの心ひとつの君し
ハ心はずるゞとさし
もこゝとあ、近江君と雲
井の姉妹なれハ此方
ゝころとゑりや 師雲井
腹の人ゝさと近江君に
てなすさめんとゝ
うきて 細よりつけて
細 近江の君と為知ゝすゝ
をすと心あふよつけてお
紫野とゝいさわやかハとおほ

ひさしう給はやゝさうの御ゆかしきまゝをとゞよひ
くへ、ゝろき君の給のよ、みれん人々ハ
じゃうずめかしうさめんよ、あそこ （細 内大臣の御子とさかりかへり）
うめんことらし給やうせ、かやうの （細 物語也）（英子頃之 細 源と内大臣）
みくぞ心もいひしき御中はなし （よの所めりて）
うりさすずよひきありけりよまいそ
どいふくゝるすあく。まびさせ給つ （内府の也）（まわのゝゆんゝ）
さ代ゆかしめちりて。あ給ひつとも （源の心よく）（ゝやうの所為と内府のゝ）
見るてまへうしと御がしたのうち （源ゝゝ）
給よつけても。あいの御心とまでくれん （内府も源のゝ一段とゑそゑられんとゝ）
時よしごあれつうりしぬうしそれそよ

ここるり
又すそゝうち 花内の御
の心ハ人をまかりてえやし
又うちゆかしもゝくも人はよ
もゝれうかとゝ
いつまのしゝゆかりとゝ
御駒等を源の有よ孫し悲
まふを内府の不快ニ悲
さしいもとゝ
つもるひしく 嵩 堅来乃
家之ユルカセナラス宮之 夕霧
を養育の養孫く御ゑ
ろさこやうよ由断のゝまじ
さようく 細 夕霧を内
の御心にそ世なくべ一ど
あふゝうにまそてさしく
く養育あつもしハ随分
の高恩とゝかせならん
と源の心の中之
夕つけつ風 師 ゑ二月

てあされんとや、いとゞゝのくらゝくし （細 さ為ハ間の心ゝ）（細 内大臣のゝく）
ひあつ雨つきしまゐる人ぞ、ひしきあ （細 人の青恩のけ）
さけびめをとけ。やうよりそてゆやし。又 （のあゝ人之）
りそゆらうちほひうにしも。人はおとろ
ゆくじうれハいうよりめしと御心ともる
見しるさ御みぐく。この君なきむしゆそう （細 一面よ寄せてさゝ出しゝとも）（夕霧の也）
んよえうろはゆかしきじゝういとゞさひ （内府の也）
しうそうそうすゞしてんとゆかしそ夕つけゆ （くイ）
く風いとそゞしくてくりかへしゝさ （孟 源ゞのゝゆかしきとゝ）
人ハらひゝきのやまうかとかとあもそ （細 源の心也）（孟 源の年老ゝうとゝ）
みるゞまん御。やくゝやうの中ゆみも。い （源也）
とられぬべききそひみもやらうよせり

やうめいのすけ目よりかたくさうしこのもなく夕アよりさうの風也
ふゐそくうちはあきさかかけんや 愚案 衛はわかきくにはうちこそふてよりふれ
てうりあくと源の宮ひしうしとゞうやうかそや かうれらかきさ人とも
て源の主のみべきことその也

やうめいのすけ 細 やうとも
藤壺とも源氏へしとそ
いへるおほえて

これきかうろうきこえし
孟 おろうよろしくとも
師 兄弟とハ是くそ恐む
ろうと思心あさよかとも迄
くきくしき 花 うとく
しきさハ直人とぞよく 細 よく
うちの人さんすゞのすゆり

類の朝しくちうるつるの
あそく
このあれの女かしらうくの
箋 六条院をさす内陸
へさもるさとかゐ源
まりそ世ゝの女かしハ
花鳥 うりとくて早下也
ゐうくにのたあれとさ
まうり
師 女の姫君うのかりか
ゆうちくに人ともなる
へし源氏乃こゝえ也
三源方あすくハあうえ
うしれ 愚按 秋ぬハ中
身く女の姫 君ハ左との
ことくあれハさきこうす
ゆうくはつきつらうこゝおる 箋
くてのりまへて
細 人くのあの行をする
へき事きまけへききとき
あそしこのかろうと 河 十五
行日金鐱 白氏文集
花 按 あでうりをうちへられ
まうとえくすぞしことなる

夕顔の君の

細 おもてうらの事

孟 一条 葵也

やうそふしのさいはひにわかれ侍りてうら
これはとりよきり給ひそうれにの御やう
くちきよけすのえしれぬにやいかにと
をつきまへれぬるよ。ゆかしく姫君ともこと
そそくそ。ものひてよね給えぬうかく
おりてこそていけりけら御消息しげ
よかへるを中ねのいとたゞのゝ人すれて
ねそこぬむきまんなめりこのへてこそれ
ちふころかさかうしいそくもをそれ
とぶよ。まうとのいらうへ御じく御かへり

源氏の早下の心也

ちさうひく。ゆかしく女かのへもかしこ
なれば。この家の女かしうら。のらぐく
しき程よりハいてせよすゝみて。ちらく
ちうすんいひちうらくかうぐへくの
とあれど。みすりよ人のおきこしひよ
らんよいくきうし。かくてすのまへむ。
いそつうやうすんへ人のこしさのうき
あくしとしらんあすゝふうくしきまくれ
わらひさしを御いうんなりふらししけ
あぢ。ぶくめくさ中てく給はれ人よなうかへ
しき前栽などとへさせ給のどそすて。と
のいろうきとしのへりし。しのやまとの中を

みぐしおろし給ひし所也帚木ノ
巻に山寺の僧都あり
もろこしの寺にて
ありけり

細 教上人のことにも心の中に
のちの事をおもひて
くわう師 かたがたの
おほやけの御
寺の御前にて

いとすゞしくゆふぐれにさそはれ
かすみたど／＼しきにおとゞ
むかしをおぼし出て
なまめかしううそぶき
ながめ給ふ
宰相もあはれなる
ゆふべのけしきに
いとゞうちしめりて
雨けありと人々のさわぐに
中将のきみはなかなかなる
心の中なれば
猶ながめいりてゐ給へり

中将とは夕霧也
細 源氏のきみの
雲井の雁をゆるされぬ事

うちしめりて中将君にも
いかゞおもひける
夕霧也
かくてもひさしく
世の中にかゝる事を
細 源の御心ざし
蔵人のことなど
いづれのをりにかと
[illegible]
年月へ
内府のこと
せんかたなくおぼしめして
[illegible]

やさしきさくらのまくまてそ人ゆうたてく
まさしくらうすり 細 源よ何世法くもとりくへきまつさきりのとくく 師 夕霧云々
さきとよ語よりんとくし内府の心すみかくく

さはつる 細 玉鬘の心
くしきをハ源く内大臣との
御中うそうの事て云を
いふかとく

うるさひとゑもれん
おかつうまとうかうと云
あかつきしそ舞大いう
がえうれどもうりうはあ
の上ずゝくにきゝつく細
されハあつりつぬく

いらんはうしろめたうあらうまじきやうなし。
細 精細ノ源之 うわさのふさはうら源氏の人ぐまてありけれ 玉女之
中将のきみとさう語あひそ、御めまきこう 内府之
れきてまうんことのかはしみさしとあ
それまもいふきくも業とて。月のあさこ
みゆれハところのみ所のすゞしきいはうへ。
源のこと八嶋の述も暑を 抄
あ代みらくておほえくや、うつは中へこ
そしけきとそ、人めして。うちよ、父のさい
ひとかはうちさふしめでて、おりしげりけると 舞大之事之
じんのおりと、ひきよせまて、うきこつよし 源氏の

さうらはいとよくうしかくかされ
よりて 発 云くしあ方云云
箋 諸ノ樂器平調をとひ
はらして五常樂を始
ともう旁まれハ玉鬘旁今
後学よとうとる心得ハ平調
和論元起別平調ハ旋
云よ因て四季よ通用之
くらく以て平調と云也
あらのことハ 細 和琴之を
いくらおかしくへみやうの
あいなるき語ハぶうと云ひ
わきづりかのつまばく
云くへのおふとく
こらくまきまらんもすし
やまとけおや 細 ちとけ
うらとく 興日 孟 和琴とて
唐よハなうしと 愚按 和琴と
ハ別よおうきてまうりく
みとけなき東楽なるとと
一筝よさらんそうし云
旋宮や 箋 弓六弦
の形とつてつくつくよ
弦をとりくれるまてと

まくはつきらよいとよくうらうらられしける 源氏之
ねもいとようあれハずいのきこえずや
うのこといかうろよいとぬるらめりや。 師 和琴之ことハ
月ころもひぬる世のなかハ秋の夜
乃月の高きしき月とらしてわく 細 月花諸くまくすり
すう発孟日 いかにぞ、世のなかうさえすしあくをとる
用じ。けらうく 法樂器よ合まりうちもとく いかなめうし云抱ののやうと
こうしきちらくもすしや志らけうすしやこ
細 和琴之 箋 八音まて諸楽器を調とし
の和よきるかし此用くのあそひ和のぬひ
やうしとくのへしりうろうんいとうし
らうきやまとこくそのうこころえそ、らい 孟 和琴之
よ八音天思有別稽之
きゑすくちくとさるしこうす。ひろく 異國之 こと

[illegible]

くにのことしらぬ女のためとなんおぼゆる
おなじくはこゝろとゞめてものゝねに
かきあはせてならひ給へふかきこゝろと
て、なにばかりもあらずながら又まことに
ひきうることはかたきにやあらん、たゞ
いまはこの内のおとゞになずらふ人なし
かし、たゞはかなきおなじすがゝきのねに
よろづのものゝねこもりかよひて、いふ
しらずこそひゞきのぼれとかたり給
へば、ほのこゝろえて、いかでとおぼすこと
なれば、いとゞいぶかしうて、このわたりにて
さりぬべき御あそびのおりなどにきゝ
侍りなんや、あやしき山がつなどの中
にもまねぶものあまた侍るなることなれば
をしなべてこゝろやすくやとこそおもふ給へつれ
さはすぐれたるはさまことにや侍らん
とゆかしげにせちにこゝろにいれて思へれば
さかし、あづまとぞなもたちくだりたる
やうなれど、御前の御あそびにもまづ
ふんのつかさをめすは、人のくにはしらず
こゝにはこれをものゝおやとしたるにこ
そあめれ、その中にもおやとしつべき御手より

そもそも日本紀などによれば、又天の岩戸は天照太神の岩戸に絃神楽より
ともに云ふ。若菜(?)は六張を並べて…和琴…
…のつくさは男官と八番書寮と絃女官と…
八書司の女房あ…
…和琴…
…
細 …
…
内府 …
…
八拙…このころ…
…
内府の …

…十二…
濃 …下暮 …
…不用…
細 …
…
よし河の 貫河の …
…和琴八律の …
…
細 …

[illegible]

やうしてまゐらすとおもふが、若たりしハ手紙のたぐひはよたりしに契りぐるひ
給ひてうか文まゐらすと書して、たとひかりそめに 勘 親きくらずとも思ひ歌やここ
てむかしのそむきまふよしせそうしてまゐらく 花鳥の義同之
弄 やさうら書ハ 細 二義あり。源の内大臣をさけすふとなりて文の義ハ源の歌なり
ふも西鬢の志給ハさうと云之 義後の義お遠説
さえん人よきんくらぬ 細 一切の藝能人よりならびてハ
しつてらり
まいられん 河 拍丈意 謂平
花 唐書よハ和文脩と
うく日本ハ真名文法と
くんハかなしるく文を
ちかとよまんてよむ
て女ハ真名して引べし
とあり愚案 文をなふ
とてのハ女の男にます
かくろべきかさるれがく
のちよ下んあるべし
かしこき 花 河 玉女 五旅
の女く 細 古文書の女
のしそく
あでも引あらるん
弄 志てしりしいかりん
りくらきによとをそで云
わらのくしむの中よ源

ろう、さうしふれんぞろうてこそ、心の
細 能ハ
そそしまうていとて人ともあらずげめ。
みも合奏しまへとく
てうれこまでよひきあせうせう
細 西
きうよこそしましこう、御中の仏海。
て、源のよ京人と多のりへかう かれ
式部ハ和歌をとくし
女のみへこそしそれバ、ひかりしとふりや
くつましくて、ほかれ給ひでも、ちづきを
ひき給ハらん、こくとうこよりやとくれりと
末く
まさよ。この所しよりてでだらくわ

の今ちがしひさきすくぐらくありやとちづからく
うれしい。よらぬて 式部の目にて源の詞色をうさらてあざとそ
ふるめ和歌よ執心れ源のそうりへあしくも
そがとのしね 細 源乃
宮ん必ずけ方のむもでうのです
を書えもし入うつぶりをよそり
西来 みぐつこりし女八年
とくさ人くじむづらし源乃
けくうてこそ書られあるゝ。
実ハちぐにりきうて和歌を
もよく書うかくざやう
りまるときく人のさかまハ
男みしむ書をもよ引きふ
身をとて源のけこうるよ
ハ身りことこそうるもん
いふく兇らく引きし
ちうかて
いくそ堅くにもこの花そもの
こ世なりまん 細 むりつくの
るとせつくあり 師 むのつす
ちうハおくにまて世なら

式部の詞之 婆ハ風のう
さうきりて、いかなる風の吹くうるとおもひ
式部のう
ハひくさ給ひとて、すりくまる
源けよいとめくしげすり、はるばるひさまて。
源の心を
こうざさらしね人のてかみは、男をつくむ
風を吹そよりしとそ、そへやら給ハとく
やよし、へくちうすよくくへじ、御のさく
それでとも、えみてまかりてうすでしことおわ
ぞでも伏んぐのしまうさりぬるゝれハぞ
細
ゆとくみちこの花ぞのくるをとせ
いしつれるさとにどふよ、いふしへ

なでしこの 河 おりし 花
夕良よ入せこそむ 弄 夕良
いゆく名よふりこすべし
がすみうらへさるよまりひやを
らるゝかなり花りの
垣根ハ夕良の上の事をい
ひ山賤の垣やあるとも
のこよ入れなしぞ
事を内府よよせ入こ
らハりしの垣根さあやし
ときうんと思しかふべきと
まかこりけも 河
ねの秋の事とかはこす
いでくもかかいもまあ
いむぞ 細 いまさことし
弄 此歌勢のみなど有あね
るくし花 是ハ此ころの
こりりねで又よもとれ

のつゞくよしん思ひしまゝにまかりたりしも
いまのことくぞ消息はかなしすこしの
いぞくるみも。いとあられなり
なでしこかをもすてしさくゝとこなつは
とかくさのをとへやるのむ。このつゆの
づらわしさよりそがゆこりうとらぶらし
うそひ咲ゆれとの花。くてくしらるなそれ
山がつのきねよおもひしるそしこの
の森ざしとこれうぶめんちへゑげよさと
えるい給へるに版げよいしるす。うへ
やるすり。こざうしまりハとうつどむ
じめて。いらしされにうらハくふし

山河いひ垣根よ 細
やかそて八内府どのも何ぞ思い入ざらこく
こもくまりハ 細 引此事入所今
こそくし 弄 此歌
ごころのさよ。ひりしとく
めて
わがなを聞くもりて人の
づしさらひのまとい
のちよらかうつし
ことりしとそ
物がひとおほめやくよ
勢とわる物よまへん
まる世のくうわたる

すて根元ものびろまじう思ひふ
まらりまふくとも。あやうくらあら
人のこゝろをうとめ山へさ侍じいふ
のどかにめぐしとくめそぶらうつかえ
しめつ。我まくのうすぬあらる
うごろの我くしのこ。あけられ我るる
うりもらそぞりくあいるまさえん
てやをうしぬ物たひおそうんさ思
そぞろのまふもあつハ世の人の
そもりいなくとのうろくしさと

くまりなるさんをしとぞみ
さも　孟何とおもふとも
業上つゞくはあらじとく
さてその中りの　細業く
のあるそれは曲もえあし
さえ御略太花散の事を
まそへしとし
さん人のあやとくり中よ
源のみてそあれとも云ひ
人と知りて太郎の事
まそし心ろくるのつくひ
かくんいさせ源成勢も書
さくりをあるとく
さくありなるさき納言の
孟　納言がしの人かうと
も二心するさ人はあを
こじあやしきは我く
つらくれりいまくらん
く誹罪事と思ひりて源の
心のみし

ごとあはれなる物なり。人のはてなき御心いとあか
しうぐし。げにかゝるまにはなれざらまし
とおもふとも。思ひのまゝにはかなりしよすから
おもくつて。我らゝらぬるがしくえあまりかゝり
くゆわしきりさらさそ。その中りのね
らゆきは何ぞうちはあらん。わが身ひとし
つこそひとへりにもとかれらん人
あきくの中よりつゞらゝんはなむ
何の物がしりへうけうらんひとあるし
すぎき納言のさいろ。あさくあるてこそ
んまかにとりあへぬそし。うつく
ゆかりありよ。いうしくゆかしうて

かいたりくらされはるゝうひ
しらてハ河　引卒　日本紀
花りてあるまくハかう
伊をりし　細　官人物ろと
のかさくそゆきあそい
としく　箋　云人の方へゆくん
あそでまいる人はあみ果結ハ
人その中とくえりてある
あでハ我ゆゞりいさるひ
之て小納言あるのさい
のんハぎとかく
ゆふうひたるさまても
おみだらと人の物とせん
ハつらひたるさ々ありあぶら
おうつくのさためなれば
さやくようなやせんとそ
抄箋

るやうよやゆかしさて、りもくゑる
いざなひそてハさひしるんやつかひ
るまゝまてもそらにきえんと思ひてあらゆ
あらされどもこゝりまてれうつるそとし
ひ今ハけしとやへいまはけうひとつけて
ちかやらよなれども給。婚がもとし
とそしくつけくうそくも笑しよ
うくでもあつらうなよ。こころめくさ院
ろハあすりもつりとゆかしくゆかれてい
もうとえさうし給ひぞ。さる人さいつ
もなれくしつうかね御じくまへさし
あしなりすて。こうまくよりしめぬむ

るゐさてしもえすぐさせま
しく　宰相中将にもあり
んとおもひとおもへは也
又御心ざしのふかきをいふ也
もとよりしらぬ人にはあらず
何もかもなく
さいはひこそあらまし
細　宮仕のかたにとりたてゝ
とりて　源氏の御心へ　詞
又実事なるとも　思ひ
おぼしなりて　後よりも
あつかふべきさまに
かくまいて世にすれぬ程の
愚案　玉鬘の心まことに世
にもてなさるれぬ源の御
為をいふ　みかどをはしめ
いふことをえ思はぬ程の
よそへりと　そをかへる
しられて
どのつかふ実事は流され
河　人よりぬれかねたるに
の実事は　　　|
異聞なるとは堂上の冥人を
御後にたのみたえ愚按かり

づきなかりなんとおもへれば、なほいとあ
さましく、さすがにうち思ひて、かかる御すぢに
さやうにおぼしなりぬべき御ありさまを
わりなくよそにみるにつけても、なほ思ふ
べきにこそあれ、この世にはいかで、とおぼしまど
ひぬ。御うしろみをぞ、いでやと思ひみだれ
うけたまはりてよりは、いとことにこそ思ひ
くるしくさまざまに心をくだくべき世
しりがたく、いとかくのどやかにもまつは
いとなきをも、かくさまざまに心ひかれぬべき
しかのみも、いかなるにかあらんと思ひたど
やかにもうけひかれ給はず、とかくの給ふ

つくろひて世になしたまへとのみこそ思ひきこ
えさせしか、かくつらきことにつけてうらみ、かこちきこ
ゆるは、いとおほけなくもはべるかな。宮仕へのすぢ
にても、けざやかなる方にも、いとをかしき
御ありさまに、おなじくは
さるかたにもてなしきこえんとも思ふ
つつましくもおぼし侍りける。内の大臣も
のはこのいまはとて、ひとつのこころの
をゆるされぬ身の人のひとりある世にも、
とかくそのほどに、いかばかりかはと、
いづくにか思ひやるべき。かねのおとの
ひとしくかかりたれば、ひかへさせ給ひ
さりとてこれよりいとどしく、年ごろのほどもなほ

細　源氏の御詞也
玉鬘の御事
草子の詞也
内府の事也
細　源氏の心
細　世にうけひかれたるとも
源氏之
細　宰相中将の詞　八丁
内府の事

よのまゝにくし 師山臧子
どうぞゆゑ猶いかうしきあらぬ
くおぼへゆるにうゝなりかけ
のぬへ

このうらわきすいは 師 世上の
めでたい源氏かりしうか源
の内府のまゝにあれば
同じ心にて何ゝすもの
ゆかしく

これまでかけしある
花のえだにかへし八十
くちかしあさからす
くは面目らしきことし

ぞそれはその中に
細 内大臣の詞 源の御むすめ
としさかりけり
もろこしゆゑあるべし
孟 源のおもふ給いの
身はさかしかりしか

ぬ山が川のみなむかへとりてもあり
たれかなくんのうへもどき給ひぬ
かるゝこのもとのゝにはにとうこそ
そ。かしめ給やゝ人はぞかけてあるこそ
ちしげうとの給ふかね(み)のかしのえなり
とさへまかく人に。いとしこまうさけひ
しかるあかりまゐるん侍る。春宮のまや
あさいゆうくふしくめでの給まうふ
とかもかぎりけるはのかしきすん人を
とこうる給めうとまふへはいゝそれ
そ。され(か)くの御むすめと。かりさはら
のゆかしうろいさしこそ。人のしろ

りけて人にも出物とく
仰おのようとおもうし
まうて

あやうへのうへしまかの
るまこ左衛門。くしてからけ
ともかき
ゆるしたのはかしきうれ
かるへし
御物はさまかは尽の
とりてたけり
りとはあれいく
ハかの伝ふ。心え
ゆくちとさきりとく
えうこのふもうとくすく
細 源は八さうくくの
そくさるきとく

あくさうわりんと
いかふぬれあくへしとそ
あへ姫君のやうに

られきのこそあらめ世なれゆるしくれ
きしもきくれ給ひて。人ぐるさ侍らむ
らむ。年比ゆめしあまし。おもしかはしく
のちりをつひぞこの世にはきこえたるれ
あるのかしあかうを過よ。かとしくさ
ちくよひそめりうつるそ。げよこさすて
うれしと。やうりめでしさきが物語給ぬ
八かりきのうのすくるくて。なりしもな
さあすめりりし。とうりぞくるあれども。お
しの物とものうへ出るべしも。さる世よ
あるさとくをかくるあかうあくんとも
ゆりし。そのいまゆ姫君はようつきずほかくの

さてうまいとこ此の雨
源へ一りしおりなれつき
の人なれは法子のやうに
りそしてましくうくふみく
なさおもししあふあるんと
云おもしまかく
さていかくさめしくるころ
孟あをいいかくるる人と
むこまたきてしそて内府の
此所
ますに三ツ入注緩ん
師 纒得給せ玉ふるを
出アマのにかひのあるんを
のらく
人かくもとなかふくなる
花あつひきうんかし
おなるさをあつらの御く
此あつひるうんとし源氏む
こそもろひよ施へきとえ
ハかふしるをんと　誰とむて
まえんとんてにゆきとかる
もかあくせん袖をとらし
其とじもわんてかお
細 源の此もうかのあまし

孟 源の恋とあるへゆう
しまわんと内府かくつ
へさいとハ詞ををし人てう
あまつるものらく
師うへまひ給てとは
源氏もくるへし 抄
し給てくとく
ゆくりもなく
細 雲井雁の此事へかく源
つ給てく

はこふもあやうし。よそまいとなし
さおの西川のまかる人ふかくありてな
い給ふるんとりひ抄し給ふて いかさ（源下之）
じめくのかたるこそまいりかえ給（又内府雲井の雁のことを宣ふ）
るんかしよりさりけるてはるかもの。（源も雲井とこ）
人がくもまるやうさくなかれあらひか（かくさくくと給之）
うえんしよの給てハるまとは姫君のはこともあ（孟 内府の心之 細 雲井一層之）
きと口おしくがやよふうろかふくま（おろかを源のおそらすまふやうに）
ておもてハはえれさんとやをうしれ
いふかしかくせましりのとさねさそれ（細 府かくせんとも）
バらくねさだらりとぶかりんかきかり（細 夕霧を君も此まてゆかしき人とて）
ゆゑしがらく抄わきてるかりかり。抄しくしも

わんはまくちられ人さの給くてかへ。
まかりやうまてもるひかめと抄得を（内府の也）
と。抄としかくさるさ。ゑよりくれ給てど。（夕霧の事をさせん）（ふかくれをなくさまへ人のかり）
うろやましくあんとらく抄かりめくしく（内府の心之）（雲井かくさとおかくさかれてく）
をまくま。ゆくりもまくかくかよつひ（内府の也）
さくりのえくかねもはとをよきり給。
姫君へひのつしまつる得ごあり。う使りの（雲井一の意…後の）（雲一下之）
はひらくんをまるそ。ふしまつるさ海おかうく（源一花…）
しくへとをとぞ。いしらくうけよさぞやうあ（雲井さきに）
見。すくまつるらくごつきも。いとう何らし。（孟 近江の君をとのくひらくんをききまえれて之）
おもしげるかまつさして。一扇をとりさりせん
てけるなかしかひるをよ桃みくくらやら

内府のおんなもしるゝ人々も
ねふれハ作者とかゝれ
袖もちうさく思も女乃
用ひとさすをいましめさ
て

ちうねハ口さぬ　河攝
假寝　荘子　細　猥近こう
うねなすくハいさむりとを
孟嫉こせるを新奈よ屋ね
かくハきれ物とないて屋
漏神とそ庭前の角よ
柞の男しまそくこれ
細ゝ猶よみをりてとく
竜も人のとしハよろく
河みへちらの西やのいさ

まてうち広ぐしの、いとすぐくこちらくあかね
どいやしかりしきすゑつきかち、人ぐさ袍
のうちろよりかゝりつゝ、牡丹やかこられど、
かくさせかわい給へど、あかぎとあかしき
たれど、ずいすまいろうゝすゝ、ぶんおけされ
るまりくくらゝうけそてつらつきのあり
めりも、はやのはめかはいとくらしう
こ夜之こねハいさみ雫ゆかりのとなかどり
いとよのそうすき海ふかくハ堺涌とのご
うりけりひらぐくにとちらくまくもそ
あやしや、女ハ男とつゐよをうつひし
てありりさしんるんぬるべきんかそく

めでてあしきしものなく まへもつけど 細 何ごとも此[illegible]
まみのくしにもよつしすくしめそつらしくこころさゆへもつけど
うしさこうすきこ 孟 何ごともうらくしとゝ[illegible]
しきそこらくしと内府の意をへ 孟 不及なきと中庸の道をもとへ[illegible]
てこへ孟不及なく平均ゆしそのなへ
まくすびくうこハ 孟 仏のかくつるハなうくれなびく[illegible]
らく生ぬのんろ[illegible]ゆとも
ひとさあつゆうれハんぶ[illegible]
よハおもじがつきあへるれ
をひきさわりへしこゝろ所
叙仏のおもむきうつもあるわざ
うも生ぬのるすのくらゝこへうこゝ
てく人のおつり若ゆうみも森
とうりのすらハるふ
細 夕霧のすか衣去るへ乃
事なでくへこひ給ふる
めをくるゝ
事もく難ばせん人をそくふハ
まゞまへろうびんさうひそえ
細 夕霧乃

らくよもすゝうわざゆもうゝかびくきくえ
うさとわりのうれハゆひ出給ひ海あれん
しこの恋乃人とあり。実つくりまいて
し給ハんせの[illegible]こそいひゆ[illegible]
どの給ふ。[illegible]やくうよう[illegible]
すらハさゝらなやらるまりまゝる[illegible]
どいゆく人わんうれすも[illegible]
人。ふるん人のうへの[illegible]
よそひろぶれ[illegible]

孟 内府須く[illegible]
野へ兵つく人のとも[illegible]
とハ試ま[illegible] 何 孫宜言[illegible]
わさこし
うとこのくさつてあんや
しうしう[illegible]
の謀し[illegible] 細 若ハ何
者ハ何ゆへも
のく分別も[illegible]今
らんとこ[illegible]
もがら[illegible]
さしあり[illegible]
しさつぞ 彼夕霧との
うすを内府の[illegible]
しさつぎ[illegible]
まる和べき時ハ[illegible]
もとこそ[illegible]
さらし
細 [illegible]の封の今[illegible]
近江の[illegible]
江南の事と[illegible]

がん人の[illegible]
そ。[illegible] 内府の分別[illegible] 若 雲居[illegible] 若ハあけれども
つゆ[illegible]
あしそ[illegible] 内府へ[illegible]
うりしこの[illegible]
うえをまかけうりし今そでこひ出[illegible]
細 雲井のも 祖母[illegible]
ぬかさうりて[illegible]
まくもつ[illegible] 細 内府の[illegible]
ゑまでく[illegible] 雲井の[illegible]
ひと[illegible] 今姫君[illegible] 内府へ
さいのいはまとうける[illegible]

人かくそしる事にてそ
孟 かへすもあさき人をとつ
れてきて人がそしるとて
近江君をかへしのぼさんも
さすがいかゞとなり
かくてこめおきたれは
近江君をかしつきかれり
くにこめおくと人いふ又内
府かしつきもせずあやう
とおもふも口をしく
みくの御まじらひにいでん
花 おなじくらさにもあ
るべし 師 さるひとりのよ
しなく
人の口さがなきものよ
孟 近江君は人の口花よは
さのみしくいふほどにも
あらじとなり
内府の近江君のかたちを
のたまふ

むかへゐてきて。人かくそしるとて。かへしをくらんもいとかろがろしくものぐるほしきやうなり。かくてこめおきたれば。まことにかしづくべき心あるかと。人のいひなすなるもねたし。女御の御かたなどにまじらはせて(ことざま人の事也)。さるをこのものにしないてん。人のいとかたはなるものにいひおとすなるかたちはたいとさいふばかりにやはあるなどおぼして。女御の君に(細 弘徽殿の女御也 愚按今姫君内府の御心よりおもはるゝ也)かの人まいらせん。みぐるしからんことなどは。おいしらへる女房などして。つゝまずいひをしへさせ給(老女房して教訓し申せと也)て御らんぜよ。わかき人々のことくさ(若人たちの笑種にはなさせ給ふなと也)

細 柏木なとを
中将なとの
の事にて一段人めあしくさと
たかいひふれたるかつ
くこんたうりさる人へしかり
とをきともひなく女御は近
ひがめる也 御ことばは不堪也
うへくなやうしき
細 当時の生のよのすみまさ
うやうしくて何事も
まうてさるしとく花も盛
かず 師 いつも近江君を
いろくとえてわろうき
女近江君もなしとなく
かしまにあるはいとおかし
こやなるなと也
はなやかにあでやかに
梅花をさきがけていひかけ
けしきなるを明らかに言也

にてなわらはせ給そ。うたてあはつけき(細 女御の詞)やうなりと。わらひつゝきこえ給ふ(内府も笑ひて申給也)。などかいとさことのほかには侍らん(返答也 孟 それ程にはあらじと也)。中将など(柏木也)のいとになくおもひ侍りけん。かねごと(孟 兼て沙汰し程にはなき也)にたらずといふばかりにこそ侍らめ。かくのたまひさはぐを。はしたなうおもはるゝにも(はぢてのこと)。かたへはかゝやかしきにや(女御の事也)といとはづかしげにてきこえさせ給ふ。此御ありさま(細 女御也)はこまかにおかしげさはなくて。いとあてにすみ(孟 女御の御さま)たるものゝなつかしきさまそひて。おもしろき(うら梅花の末開きて奥床しきやうなる也)梅花の開けさしたるあさぼらけおぼえてのこり多かりげにほゝゑみ給

中ねのさはえとく　暁中ね
あはれきこえさはえそ
あらあきとしいつる詞く
細内云は女房ハかきる詞
と補来ハ第一の嫡子なれ
どもよき事ありてひとへに
うそくさてきとくわ
うきとハそり中ねまで
のまうくるひ[illegible]
ある詞をうけゝり
ありて此法師のくまり
細此一あでにきはまの[illegible]
有は言ありまなまり
愚按此詞女房内府の[illegible]
ゆくもそろそろくり
もぶんうくそとろりて
孟うちうれてとおるで悪
のちくちがる称し
てとつとをらまそりと
てまうさつく　同小人贅 セウサイ 聱
細ちひさうさめとこふ[illegible]
そりそとてハおひての贅
を取てりとうちへ暁孟同
そ此事もよりめんし　[illegible]
いよ其字町とめとて細り[illegible]目の小国をさてそもあらくきた
ほともの人さきとかとも　孟前叶、字を制してひそかに法り言んとて
ほなりやくし　細大国をこ
ふまへあらての五節みな
し孟しきさ国を甚やし
よ新もとくさくて惠子
をあ新おし　師久しいで
やわらくハたやくうち
ゐんきさいのめとうよ
まぬなるへし
中よるひへ　細打つれを
の中にるひへまとまがり
打あらるすのくるもを
ある往來日　愚案あるや
もうしんとハ内府のミて
开そのめかるへし
うきうひらうよ　細泥土
ちうからとく下もるくまき
まり孟日　師一段　額のち
いさこえ字ハ不用
つまらるあ　細河海あ
役あり何をもつ務経程
第一の義とうつ仕さし
何色まの善悪の国まよ

つるぞ人のよにしるかりけるとぞきこえ侍る。
中ねのさはえどらうわりきこえ
のもくろさたるありおぼゆ事も。いとあはれ
げなる人の法施じくれ。やうやうにありさ
のこゝろよくすゞしおりてのぼるぞ
つれづれなるくるしさそそろ
のうちとしそぶれうつわる人のあるや
こくうくう給ておいとやらしゝ
りくそ。なうさいをうしさいにとりて
いしまちくやおれうそくちりて。
これよとの人のきさきとよぶともで[illegible]
しめて。ある給つまものの法そめるう。
さうしとのあはれさにあふさるるれ給。この
人もそく執念ちやまる。法施やくと
どうしとおもりつくとゝん。かも打いふを中
まるひのりやもとん。いしあさうさ
ともしうり。うつらハひらぐりくまう
よあいざをうづきさうらそさふらうらく
つうつきうろげなるとも。ひとさいのいとち
やうえるしても家のあはつうはさとそ
あられうるありそらりしそのおはは
あけあてでしくしへとあくしうべくもあく
まで。ういまやおりあらをとうれ給よ。いを

つく今せの容皃ハ妍醜ありと云ども云ざれハ近江君ハうらみどもさとこそうらむまつりあしくねハ罪ふろ
おもふとも見るに一統縁なけれバかう人ハ罪とりきこえくじ君にあさまし所なる
ゆへなりける
うてりの事なれハ 細 あは
立のそきさまふしぎなるに
内大臣ハ内へ入ての給ふ
こゝし承くのこと
細 関白なれハ譲もな
きこと 曖昧
年比安穏つゝがなくゆゝしうこ
すくまぜし給ふか
細 又内大臣を年来ゆ
りくるびしく
細 河海の抄に
しるくぬ
侍ぬ六の心ありよりてま
と寺おさめんの侍る
花双六のしきしようこ
からてなやまし給ふ

くきこうろづくこそす。うくてりの給ハつ
内大臣詞
きこうくらねくきくまゞやあつくこと
げくのきみそて。えよりしひまうでとやと
近江君の人を寄せてのたまへ
のすくハ侗ののしきこよみくうくてふ
細 近江君之詞
らんぐすまのあれさひり侍んあんな
鬘 近江君之
つるすくゆりうさうてまぜしかりや。
内府の詞
つるよえまへぬどうらこそ。ほう
よぬらし侍れときこて給。げりの分よ
細 内大臣の詞
ちうつふ人も。ゆきしくるまよろう
まそもろうしうまんしうねそハこ
しうじ。えそしもありゆうじきこゝろさ
身にかうひりくさるまあるとも

うへてのつうしまつりけ今こそ
義しら交てありさこ石
仕人の中ふそてハ大なこの
ろ事八月目ふかゝぬをぞ
れぶよ女子乃画をうかに
ハ歎れとなきう抱く泥や
内府のおむもわとそ大も
りしうぬハ見ぐりしきた
しり分らくもかし
給ぬくいふ義し
細
ましてとハ実
てゆうむをめまどくいさん
よあくさうしのふとも近
江君へ咲とうかぶなし
帥近江の君のありさう
と下まおそのまへるもさ
とくくさうとく
おりくまりつや 哢 両 尿盞
くく何此家く
元大盞 延喜 斉院式 今案
小便筒のしるし 細 えと筒
やくのをく北浦ミと流
大江をありくありらと

つまうべてのつらうしまうりへやうを
細 たゞらの人ふてあそばされど
とうゝも。そのづらしさうまうまうひく
人のえてともめてもうるへしくと
よぬりのみすれど。ゆやもてつげ
まぐるよそのんの心をかうのんこんど
さうてらいさハよまれバ。ゆやもうての
みりてふぜろうくめぐひかわありまして
よの給さしつれハ気色のそゞろ
近江 君の
らんで。何うそはこらうきへくまうら
細 近江君の何両 何かうされてよく
ひ給しんぐこそそこうろせうく紹へ。ゆわそ
とのろくりさハてそとく
ゆうらぞよりみも。つりくまろうなん八妻
えさまん。ハ。えわんくし海てそ折わなくひ
細 内大臣之

ことひ法寺とわかるゝかびと 孟 小便壺なる
しつかうしの事と申侍りとは
ことはとゞこほりて近江君の
の詞也

弁少将のうちあらは
孟 わきまへ孝行なれば
此舌どもやすきとのめ也
よく 師 孝行 八孝
行なきことなり

妙法寺 細 近江の国にあり
箋 妙法寺近江国神崎郡
郡なる所にありと
花 今案近江国ふとぞ
聞し 妙法寺の大徳産
屋にはべりしあえもの
ゝし
あへりの 細 あやかりて
したとさりのすぢや
よ葉りしなるべし

まで。いとにげなきやくなゝり。かく〈内府詞〉〈役也〉
たまさかにあへるおやのけう〈孝行也〉せんの
こゝろあらば、このものゝ給ふこゑを
すこしのどめてきかせ給へ。さらばいのちものび
なんかしと、をこめい給へるおとゞにて、ほゝ
ゑみての給ふ。したのほんじやうにこそは侍〈細 近江の君詞 師 舌早なるは母の生つき也〉
らめ。をさなく侍りし時だに、こ母〈こそ母の事〉の
つねにくるしがりをしへ侍りし。妙法寺の〈細 近江の国にあり〉べたう〈別当〉
大とこの、うぶや〈細 御産也〉に侍りける、あえものとなん歎〈なげき〉
侍りたうびし。いかでこの〈近江君の詞也〉したとさや
め侍らんと、おもひさはぎたるも〈細 内大臣感し給ふ〉、いと
けうやう〈師 孝養也〉のこゝろふかく、あはれなりと見給ふ。その〈内府詞〉け

ちかくいりたちたりけん大とこ〈孟 妙法寺別当の事〉こそ、あぢ
きなかりけれ。たゞそのつみのむくひ
なゝり。おし、ことどもり〈細 河海に在〉とぞ、大そ
しりたるつみにも、かぞへたるかし
との給ひて、子ながらもはづかしく〈内府の心也〉
おはする御さまに、見えたてまつらんこそ〈近江君のあはつけさをいふ〉
はづかしけれ。いかにさだめて、かくあやしき
けはひもたづねずむかへよせけんとおぼし、
人々もあまた見つぎ、いひちらさん事と〈細 内大臣の詞〉
おもひかへし給ふものから〈近江君 女御の方へ〉、女御の里に
おはするころ、ときどきはかのわたりに
まうでゝ、人のありさまなども見ならへかし

ちそのつみのむくひ
孟抄 近江君の舌早なるは
前世に大乗をそしりしむくひならんと也
罪のむくひ
下の詞どもにて見る
ことゞもりとぞ大そしりたる 細 河海
ちかしとあれば
孟 河 瘖瘂 法華経云
若得為人聾盲瘖瘂
誹謗斯経故獲罪如是
師 大乗は法華
経の事也
ようし 花 弘徽
殿の女御の所へ 孟 近江
君と女御とは姉妹の事也
不及なれど 師 女御へ
内府の御かたより見え
ありさまなりとぞ
なるほど見えそめ
人のありさまは面目なる
ことなりとぞ
よくよくならひそ 紫
孟抄 この近江君の事を
わひのかきことはなどあると

ひさうぞさうらうは内府の子と定てやうの人とむく人うるひらんと女法の云ひうらひ女房
達も阿くはえて人々らへらんすと細く内府の云条しかえ
つくもおあうさへつぎが見渓氏孟見蓍(口伝)之易業見渓へらんへこの治男くまた
あんとく見着ハ公主(?)義に人付て誰もくえちくさんとく
こゝろざうすちさき人々も
ちぐれなん今も人中に生す
ふて身こそを氵きうらへで
そのづくろくまつくるなり
くし
さうらしして　細　女法の室
よあしきを附くまうる之
さくうと之師その君さを
して女流まゆまえし多人
らし
あきとくそても　箋　此書を
えうかりし之るる将務之いり
うる難浪ともつとめん
之　河海抄をわづえ
しらすハ教くらりるるとくを
あらてもつけえてそてえし
花　猿楽(?)浪永給(?)新説

らうしてこしまり給るんやしのくふ
へバいひしられうしまうしとして侍りまうれ。さく
いうでもく治らぐくようすまへられならん
んらしをるんねてもさあそしも。ぶらでろ
あるまじ誤きひまへつるみもあしらず。法ゆう
しがうは侍らバ、あなをらへいてこそてもつ
うちまつりるんとらつくしげなりのまどそへし
さえづれバいかひまうしくかうり　ていと

細　王(?)定の御こと
女法子として
女法子とては
支る(?)事とも
今おもしえて恐と云
細内大臣のこと

鎖　後被母品
うくうあうさらうて
細内大臣の御ふるを被と云
細とらけて我がひらひ治
やびとをりしてえうり孟給我
設食のへこ
とこうすまの給ふるとえをも
細　とこのやうくのこと
無されうく　箋
治うゆけの人　細　此内府
よわえふるの人とぶとまくづら
しく見てえてあらく給ふ
ままん、ごとのまは君を
侍ふもつうひあへ氏く　らり
箋　近江の君ハ愚かなる
ゆく
うちうて　くる何く
細ト　一日を　この給ひく
うしくさまくもとも
さいりし云へ定ひてハ近江
君のまらんらるるい云ひ
ゆうちくらくし　箋　此給
箋　父大臣も此人をもて

うあうしさうらて、うらうびひろひ給ひつゞさと
さいまつり給ふるんぞ、うらふのあへりのよりしもと
ん法の師ぶるよよそつくつてこぞとよ乃
給ふ平すやそとそらくもで、うかのかさだ治とうさ
こゝ中のかもいてゆうそりけるよねくしくしく
花やうる之海くらゝ、みなふうさまのへらえ
えみくさ治うしくらをもえうつらしへさて
いかうう女法よのへらへへまあり侍らんと申とうけれ
バいひう之日ろるぶやいのへつうるんうらこ
らぐくしくは何かハきりしとうられハぞふ
うそのりしの給をそへくまうり給ねらうの
四位が治くらうのいつきやゝてうらさぜ

細　古歌とるそうへつまとし
士、法人の
細　のり
しのぶれうく
細　とこのれのそのこく
内府の子のたる事と女る之
近江君のこと
田舎めをまて御まうくへ
内府の心
近江君の詞
細内大臣の法なるこ
細　く云捨て給ふうとへ
内府のこ

ちかくひかへたる 花 かの石乃
かひすてくの詞よみ人也

かすかにもしらしく
細 これは近江君の御よみ
よみかたりまさに分あるやうと
花 孟 近江君よ似合ぬ事を近
うちきかや 細 是猶近
ことくしくすくしと也
うつて親とも思ふ給ひて
似すおひめぐらしく おやま
さまよりけのかたりと見え
例の君の入乃 異本 近江君
五節とてさくゞしく此又
節よ近江の君と云る此
より猶ふくさこすて近
江君をあなかしく云也
しかりなるへし
いまはひとつくちよ
孟 五節を制して詞

ゆるされたり 五節の詞のうへよりいふ 孟 内府
うちのいかゞと云 孟 内府
孟 細 これより近江君の
よみあなかしく詞とあり

細 先ゐる界のおりをきりみを
付てみるべし 孟 是より
若手の昔よとくへのことはよ
孟 おれの詞くとらるゝとハ
一段とくるゝるやはすれ
ども何ともおもしろき
流るゝ積え

おうらうる事ぐらり
かゝるをするもの言ふる
ありてこともありつべて
ききゆうとく
のこりおもはせ 孟 殊ぐ
物かりも末のうたを人のこゑく
さる殊種よえ今のをく
気は何とみる人の聞きく
やくよあのへくやしみかり
未進あり此もつかえくし
さなれて其へ善く

うち笑みて いふかひなし これはわろかりけり
と見えたりけるにて いかでかわれわれてこの
花 内府の出給を近江君の見送り給ふ / 近江君の詞
わかれおやくさりけるたねながらあやし
わか身の事を述ぶ
きこ家よおひ出けること とのたまふ 五
節ぞ あまりことことしくはづかしげにぞ
おはするよろしきおやの 思ひかしづ
かんにぞ たづね出られ給はまし といふも
わりなし
花 近江の君の詞
れいの君の人のいふことやぶり給ひて
めさまし 今はひとつくちに
ことばなまぜられそ あるやう
あるべき身にこそあめれ とはらだち給
顔やうけぢかく あいぎやうづきてうちそぼれた
るは さるかたにをかしくつみゆるされたり
ゆるされたり たゞいとひなび あやし
き下人の中におひ出給へれば物いふ
さまもしらず ことなるゆゑなきことば
をも こゑのどやかにおししづめていひ出
したるは うちきゝみゝことにおぼえ をかしからぬ
細 耳異也
哥がたりをするも こゑづかひつきづき
しくて のこり思はせ もとすゑをしみたる
さまにて うちずしたるは ふかきすぢ思ひえぬほどの
うちきゝには をかしかなりとみゝも
とまるかし いと心ふかくよしある
ことのはをいひたりとも

かうきこえおかしぬ　抄 弄 ふかしとおもへくま、かくれねども、かくるゝ人の経
よそぐへて読るゝしも面白しとも先ハ抄りつゝく
かゝくうりおかしと　抄 河 作りも源氏の事をこそいへ　いかやうのからめくしくしおかさるゝを
の事かくまうくれくきこゆべくもあらぬを、言ひくにあはつかましと云く

とも思ひへくもあらじ。あはつけき　壹 は
桐 さ海よの御いづらこゝにあくしくしくこ
しぐれそ、　透 春経　なくはくよ御うりすゝひさ
若めのとりのこゝろよ思くいひ　こゝ 海よ。
りそゑしいとあやしきこゝやつゝしこそあり
　　源氏の君のゆかり
なり、いとしいひすくハあわくもぞ、こゝそけ
　　首尾せんずゝかし
あまりりけ。あはらぬ思ふくらとく
うらつけをとし給ぞそ、又心あ厳よまい
　　吉 孟 源氏の杖ことし
　　　　　由 わかあしく
　忠 座く
まとのこまゝるを、ちぶくあうさ海なる
　内 府のうへにも
ハ桐壺、ゐりてそゆかを、のきり年のせんぐ。

ゆかしの君のつまからの御かたそ
こゝも 箋 天下 テンカ と後へし
拝 天下 アメカシタ と後へきまや
細 内大臣にてそのかくて給
あからも桐の連枝ゝち
まれらんれるにてけるし
　　発世まちくひすく此心を
　　かくらし
帝おはしの后うくらる
つまや、后のうちも后き
ちうそんやとの后の皇
のかうくしきとく幸
の御し
あいきまの　細　ぎらう文
の御行をかさはのかしこ
弘徽殿く　古今八世れぬ
ふ他やあたこともかの
まちかきれともおふう
をすそ
　　くげみむうすらしも
　　河 海抄　云うかく ハ　新古むむび
うちちくなれどるとその
圏をかくさまへ所きこ
　　そハるまるきときへこう也

ゆかしのまゝ、天下 てんが よをなびきもこの次くく
ぐハのまけそくりてなし給へん。みは后の
　　君のさきの事かるべく
うら思ひくそうらんやとの后いかに
　　孟 源氏の后の方へ 地
の御いとうくるうりや。世間文なれ給
　　　　吉の女御
かくさのおりのへきはいふつてひる
　　近つさまつりもうかきを云
　　　　　　　　　　　　　　　　　女院の方まもちとし
ごい思ふくうけふむびらりのまゝし
　せさ
まかくぬいなくその圏とやをへり給
　　もとし
つんもかん思くれねどもむきる結ひ
　　どへの家なりとも
からしきれども、あなしこやくしとく
　弄 文のうちにききこし
むつかしそ、うくみはかくりやくれよ
　　　　　この御かたら
もまつりうんとさうまへしみい、かうふよ
　　　　　　　　　作 いかが
そゆうゆや、いそやくあやうききこれ

あしねとも　河 あつくぬどもしきつのくえべうこくれぬうやさうえて八葉の中、
てんぐらうそ　花 箏のくらくしく点ぐらうろく[illegible]
のあふまをゆうきや　河 ゆくさのそきゃさの池の[illegible]
わう師 女流の近江君をのとひきあくべきよあらん[illegible]
ふる世川よを　河 あしきるをおしまこうるよみうすと川を[illegible]の毅すうく
孟 さ絡のおしきくうをさて

と川よをとして[illegible]
台詞
まわうこひさらのうこしれいうぐされ
いうぐ[illegible]のうんるこの[illegible]

わくさきうし[illegible]ひしうきのよいうくさ[illegible]
ちよいうわうて、のそのもらじとこくして、
うしんひさうくさ[illegible]もしらじとまで[illegible]
もうつくいしばめらべうりのやじく[illegible]
さ[illegible]よもらうひくこうれぬぐくこゆうとも
くらるつくてきすうよいく[illegible]くらくち

細 幸来[illegible]
らさまうとく[illegible]長月四の句を注とするとき
孟 近江君幸之[illegible]
[illegible]
何とも[illegible]
うざきとハいうてあいうんと
いうんぐうの[illegible]河いうく
されハ蜻蛉日記の[illegible]
きそゆうとそハらぐされ[illegible]
どまふをとゐりて[illegible]
大川あの　河[illegible]
おの川のべの[illegible]
よ[illegible]
ぎ 細 大川のべを閑[illegible]
あし孟[illegible]
しのらし

あとじゐうよ
孟幸下うよ下のうつくさやうよ出く
まくしこの花より
河 文とハ紙のゑめの花よ白
る[illegible]紙を[illegible]子
よ[illegible]
るや[illegible]のわう[illegible]
[illegible]墨[illegible]
[illegible]

かう師幸[illegible] 河 [illegible]
いうくまさむすびて、[illegible]の花り
つけまう、ひき[illegible]しうしけくしきやし
細 下女之師 文の端と
いとある[illegible]いう[illegible]
ワ[illegible]女流のれうこのざいうんぞ[illegible]
ゐゆ[illegible]
もづくうしつさそ、水のさいよ[illegible]
らいまり[illegible]
のまく[illegible]
ゆうんどうす、女[illegible]
うまへ[illegible]中納言の[illegible]
うきつうひて、そ[illegible]

見すりくゆへくしりく
ず八　義也八女法乃
詞之此君すりくのこゝく
由然ども又をとりあ
つめて芸願なこそ試
法花なども左うに其お写す
八近江君のくわよおま
さ雅まむろりられ八中納
言にかくまた　細言し法
そらすとりされうくし
りそ知てこそわらる
孟近江君のるのられバ筆く
て給し所女法の遍段の
文られバとかしてハ見よ
らハぬし
かしきこりの　細
の事もし中納言の君の下
詞し所近江君の文に書
くかるすかまバとうすか筆
かうし
さんじう　孟室君也よ
ならハそ女法の文のやうに
うきるうし　細文の侍也あり

うしき法文の見るも作りられ也
ゆりげよそられバざりのりくえ
らるゝぞさやかわらんバおりしげなくも
るうれとそまうち点とすうくゆくこ
らぞいゝうしもや此りひおしかれかんや
とそりうさまへとゆづり給りてまかくこそ
あるゝなうさへでいゝ御おりしうしてられり
らまらひぬれ在りしこゝにだ此りしきとつの
さぢよのかとまつりれて給かればつとし
さ世ふへこそ、さんじうさめきてはバこ
おしうんとそ、ようぶ法のめつきて〳〵
ちりきこまうしるうきいかがつうるきい

うさのくわりとうけそう
ちゝさまうしりうくこ
わるさきハらうめしこそし
ひさらなり　細　四ケ国を読
る　孟むりとしこを論とし
とり者心而の事の詩く
孟中納言云義緑く或するよ
まる而るすれハこなさり
も四ケ国を読るくし
わるうくそ　細女法の法門
くまくらし女衛の事也
るとさひまかそハとう
まそおりとけずく
き何とのまへるを
孟法也およしと義読乃
れとゝ云諸句も心女よ
しておはどまりとれ
わせらうしれてまりて
へとさし此人源氏物語
の根本く
ひとおすへうりしうき物
孟其へ名　表焼物く悪阿含し
とらし　河蜜のるとうは
合香の下品のるへ仍て

しく
中納言云常住
ひさちなりすゞのうきのす
うきくらいそよろこびれの
まことこゑれぞおれう
こゝろのまもさそいひるを
けそれてげよおかひされば
人さかし人侍りたんして
えしいぞしつれゝてゆりし
つきやまびとのまへるをし
へりきそれりのくと見て
おきさせろ後をとらふりの
うよういつけでさゝぐりひら

あまくだるとく
出る人　細川幽斎子孫にし
悉皆相伝なり由緒
あり〳〵てきしるする
るすあるべしと是も
人の数なりけるかなきたく
ごさるまし

つるぎのたちまなかざはしらずありけりや
うづきよりの射翁（玄之）の作どきてしるくい
しれこともあるいりし